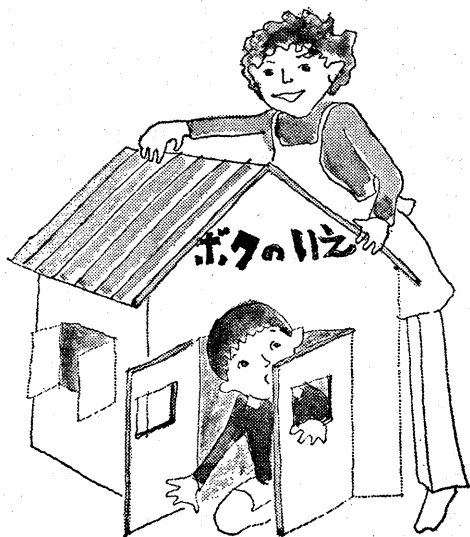


若いお母さんたちへ

—ゆだねつつ育てるということ—

はるにれの会
入江礼子



この会のメンバーによる連載も、今回で九回目となりました。まずはじめに、ちよっぴり我が家の紹介をしておこうと思います。自宅は、千葉県の上原市という臨海工業地帯を持つ町の社宅団地の中にあります。結婚直後からこの地に住んで丸九年が経ちました。団地の中では、子どもの数が増えるのはほぼ時を同じくして二DK、三DK、そして現在の平家の一戸建と二度の引越をしました。家族は、三十七才の夫。この工業地帯の一角にある工場に技術者として勤務しています。私、三十四才。長女を身籠った時から専業主婦。長女A、小学二年生。長男T、幼稚園の年長。二女K、三才。こ

の五人で毎日生活しています。この社宅団地は、その性質上、比較的若い層が多く、「犬も歩けば、子どもと身重の人にあたる」という特徴を持っています。子育て中の人が多く、老人といわれる年令の人は、殆んどと言ってよい程住んでいません。そんな場所ですから、Aの生まれた時など、同年令の子どもが十指に余るくらいおりました。アパートの間は、社宅内にある公園が主な遊び場、一戸建に移ってからは、庭と御近所の家庭が主な遊び場になりました。公園で遊んでいた頃は、親共々外へ出ていました。そして今は、親がついて遊びに出ることは余りなくなっています。

今回は、そんな我が家の長男のTの日頃の様子から、私が育児というものを、自分以外の人に安心してゆだねることが出来るようになってきた過程を振り返ってみましたと思います。

「お隣りさんちに行ってきたーす。」Tはこの一言を残して、我が家の裏にあるOさん宅に飛び出して行きました。今の今迄AやK、それにお友達と遊んでいたのです

が……。それから二時間半後、夕方の五時過ぎ、Tは「ただいまーっ。」の大声と共にニコニコして帰ってきました。家をあげ、Oさん宅にお邪魔している間に、何があつたのかその時は、知る由もありませんでしたが、心が満ち足りて帰って来たことだけは、私にも感じ取れたのでした。そういうことが、一ヶ月の間に三、四度あつたでしょうか。ふと気付いてみると、Tが自分より幼ない子ども達、例えば妹のKや、そのお友達のN子ちゃん、S子ちゃん、そういう子ども達の面倒をみながら（ここで面倒をみるというのは、例えばその中の一人がぐずったとしますと、Tは自分のしていた遊びをちょっと横に置いてそこへ行き、あれやこれや提案したり、要求を聞き入れて泣き止ませ、又遊びのリズムを取り戻すということです。）自然に遊ぶようになってあることに気付きました。その八ヶ月前だったでしょうか、私は当時ベターホーム協会という所で、お菓子の講習を受けていました。その日は子ども達を預って下さる方の都合がつかず、当時二才になったばかりのKと、四才八ヶ月だった

Tを連れていき、二時間半の間、託児室で預ってもらったのです。講習を終えて迎えに行くと、Kはワッと泣いて私に飛びつき、Tは、もう帰るのかという表情で私のところにやって来ました。託児室の方は、「妹さんは、お兄さんに頼りたくて、ターちゃんと言って寄って行くのですが、お兄さんの方は、自分の遊びに忙しくて知らん顔なんですよね。それで妹さんは、泣き寝入りをしてしまいました。」とおっしゃったのです。この時のみならずよくTは遊びに没入してしまって、まわりのこととは没交渉、ということがよくありました。年相応といえは相応なのですが…。という具合で、それまではTが年令の小さい子どもと、それなりに遊んでいる場面には、殆んど出くわしたことがありませんでした。それが先程述べたように裏のお宅に何回か遊びに行くようになったあと、ちょっぴり大將っぽく遊べるTになっていたのです。

ここでこれまで五年間のTの我が家での位置についてちょっと述べておきましょう。Tは、姉のAとは一才九

ヶ月違い。実質的には年子と言えます。生まれた時からAがいつもTの傍にいました。その姉が幼稚園に入ってやっと私と二人だけの時間が過ごせるようになって間もなく（約二ヶ月半後）妹のKが生まれました。Tはこうして家では常に姉妹と一緒におりました。私と二人きりで飽きるほど遊んだという経験は皆無に近いのではないかとさえ思うほどです。その為でしようか、夜、眠る間際になると、「お母ちゃま、だーいすき。」とか「背中が痒いからかいて。」という風に、昼間甘えられなかった分をそういう形で出して来ることが多いのです。AやKがそういうことが殆んどないと対照的です。ところが昼間は私を要求せずに一人で遊んだり、同年令のお友達と遊びに没入しています。私がTに呼ばれるのは、彼が「作り物^{つくもの}」という主に工作の類をしたり、オマケの自動車やらロボットを作る時に、どうしても出来ない部分にぶちあたると時ぐらいます。それすら五才の声を聞いてからは、余りなくなっていました。昼間ぐずるのは、お友達の家に行きたくても一人で行かれない時です。姉

に比べると早い時期からお友達の家で遊びたがり、私の都合などでそれが叶えられない時は大声で泣きまくるといふことがよくありました。しかしこれも、自分で行かれるようになるのと大部減ってしまいました。

とまあ、そんな具合なのですが、ともかく家にいる時はT一人という事は殆どなく、必ずどちらかの姉妹がいます。その為かどうか、Tには、私共が「サンドイッチコンプレックス」ではないかと思うようなことが時々ま起こります。例えば昨年夏、夏休みがはじまり、それまで学校に行っていたAと、幼稚園に行っていたTは、久し振りに一日中姉弟で過ごすようになりました。まずはじめに起ったことは、「大喧嘩」。それもA主導型の口喧嘩です。Tは男の子の割には喧嘩の際、手を出すことが少ないのです。勿論、同年令の男の子とする時には派手に手足を使って喧嘩するのですが、こと口喧嘩となると口達者な二才年長のA相手ゆえかありません。それでついにはたまりかねてヒーッとひっくり返って泣くこととなります。そんな喧嘩が日に数回繰り返されたあと

(約一週間)、嵐が去るように姉弟喧嘩は姿を消しました。やれやれと一息ついて見守っていると、八月に入るところから、Tが吃りはじめたのです。勿論本人は気付いていない様子でしたが大人には、それとはっきりわかります。更によく注意していると、特に多いのが「ア」を発音する時、Aの一番上の文字です。最初のうちはどうしたんだろう、どうしたんだろうと思っていましたが、これだけ姉弟とひっついていては、よく遊ぶといってもA主導の遊びにひっついては吃るのも当然と思うようになりました。Tはそういう症状が出ながらも、Aと水風呂に入って遊んだり、相変らず見た目には、とつとも楽しそうに遊んでいるのです。真夏の三週間、吃ることは続きました。そしてそろそろ学校に戻る準備がはじまった夏の終わり頃、日によっては吃らないことがあるようになりました。Tの友達も団地に帰って来て、そちらに遊びに出向くことも徐々に多くなってきました。そして九月はじめ、幼稚園のはじまる頃には、吃りは消失していったのです。担任の先生にもその旨伝えた

ところ、幼稚園では全くないと驚かれた程、その消失は劇的でした。このような夏休みを体験して、私はきょうだいのみで過ごす、楽しくはあっても、Tにとっては安住の地ばかりとは言い切れないのだと改めて思ったのです。それだけではありません。こういうTには、本当にお友達、それも同等に遊べるお友達が必要です、外で遊ぶことも重要な位置を占めているようなのです。

更にもう一つ、こういう事がありました。年が明けると、Tも遅ればせながら字を覚えようという気持ちがかムクと頭をもたげて来たのです。ノートと鉛筆を渡すと、自分の名前から読み書きしはじめました。するとどうでしょう。Aがやって来て「あっ、ターちゃん。字の練習はじめるの。それなら私が一年生のはじめの時に使った書き方のノートがあるからそれ見たら？ それに「た」の字はそう書くんじゃないよ。もっとこうしなきゃ。あやなんか四才の時に、もう少し上手に書けたんだよ。」と、もう機関銃のごとくしゃべり、好意から出た言葉（いえ、もしかすると、追いつかれようとする者の焦

りの言葉だったかもしれないのですが）とは言え、さすがのTもうんざりしたのか二三日自発的にしていた読み書きの練習も、以後パツタリとしなくなりました。空白の二ヶ月。たまさか自分で書いていても書き順、読み方など一切聞こうとせず、まるで写し絵をしているのと同じように字を書いています。「この字はこう書くのよ。」などと言おうものなら「いいのっ」と言ってパツッとノートを閉じてしまいます。そういう様子を見るうちにととうとう本当に読みたくなったのでしよう、今度は書き順と読み方をきいてくるようになりました。但し、Aが登校してしまった時間からTが幼稚園に行くまでの朝の間です。Aがいる時間には、絶対にやろうとしません。そういうことが数日続いた後、たまたまAがTの書き散らしているノートをのぞきました。「へえーっ、ターちゃん随分上手になっているじゃん！」と言うのです。それを聞いたTはニッコリ。こうなるとさすがお団子のようにくっついて育った姉弟、私に聞くより姉に聞いて、Tはその覚えるスピードを増しました。

Tにとって新しいことでもAにとってはもう終えたこと。そういう意味では、Tはいつも後についていく立場です。その割に今迄こういうぶつかりあいが少ないのは、Tが熱中しているものは、殆んどの場合、Aが遊んで来なかったものや、してこなかったことに集中しているからです。夜、私などに本を読んでもらうことが好きなのが共通しているくらいで、あとは、ほとんど重なりません。きょうだいの生まれ順は運命とは言え、年のついていくきょうだいの確執は、私たちが想像する以上のものようです。Kに関することでもAが居ればお姉さん役は常にA。Tは上でもKと同等扱いで、兄として腕をふるえる機会には、それまでほとんどありませんでした。

そんなこんなで育ってきたTですが、今思うと、TはTなりにそういう環境からの息抜きの方法を、知らず知らずに体得していったように思うのです。その一つが幼くないお子さんのいる御近所におじゃますることです。冒頭の方で述べたOさん宅には、一才半になる女の子がい

ます。Tの対等の遊び相手としては物足りないはずなのに、そういう所へ行ってホッと息抜きをしてのんびり遊んで来るのです。きっとそうするうちに普段フル回転しているTの心のエネルギーが充電されるのだと思います。Oさんも、はじめTが来た時には、正直のところちょっとびっくりしたと言いました。「おうちで何かいやなことがあったのかと思っただけ。でも遊びに来たいんならM（その女の子）では力不足と思っただけけど、ターちゃん（その子の名前）の気の済むようにと思ったの。」とTを迎えてくれました。

私はこの頃になって、やっとこのように、自分の手の離れたところでも子どもは育つと、心から思えるようになって来たのです。それまでの道程には長いものがありました。Aの妊娠が解った時点から、私は専業主婦でした。そして「自分の」子どもが出来たら二十四時間私の手で育てたいと切に思っていました。それまで子どもに触れた体験は多少ありましたが、二十四時間というのはじめてです。例えば、今迄実習生という立場しか持

てなかったものが、幼稚園の担任をはじめて任された時の気負に似ています。そしてAの出産。その後は、私自身の母に何回かミルクをたのんだのと、熱で半日寝込んで夫にたのんだ以外、ほとんど自身の手でして、いました。入浴させるのもわかりです。そういうことが自分の手で育てるということだと思っていました。本当に恥しいことですが……

けれど、それが驕りであり、不可能であることを悟ったのは、Aと二人きりでむぎあって遊んで、お互いに息が詰った体験をしたことと、Tの誕生でありました。それでも私は、その頃、やはりAは手離しきれなかった、いや私の方が離れられなかったと言えます。以前に比べれば自分一人ではかかえきれないということが少しずつわかりはじめてはいたもの……。そして三人目のKの誕生。この時点で我が夫は完全に育児要員になりました。彼の助けなしには（単に経済的に扶養するだけでなく）その一年間は乗り切れなかったと思います。

と同時に、近所の方とのつきあいが今迄以上に必要だ

と痛切に感じるようになりました。ここは社宅団地だと前にも述べましたが、親しくなっても転勤あり、念願のマイホームを建てて出て行く方ありで、永続的な関係というのは、なかなか望めません。現に、十指に余る程いたAと同年齢の子ども達も、今はすべて住む場所が変わっています。それでもやはり親しい方を作ること、少しでも自分の子どもと同じように扱ってくれる方をつくり出す努力は必要だと思うのです。自分の子どもと同じように扱うということの意味の中には、その子の親に遠慮せずダメなことはダメということ、又、相手に気兼ねする余り、自分のこともばかりしかることをしないということが大きくあります。コツコツとそういう関係を日常の中で積み上げて行くうちに、子どもがよそのお宅にお邪魔しても追いかけたり、口を出さずにいられるようになると思うのです。むしろ親という時よりも、親のいない所でこそ伸々と育っていくこともあるものだと思うことも多くなりました。TがOさん宅にお邪魔するうちにそういう力を蓄えたように。

ここでもう十年以上前、私をはじめて幼稚園の年長組の担任をした時に出会った出来事をひとつ挙げて結びにしたいと思います。

その組のK君が腕力といささか暗い感じの強いN君という子からの手出し口出しをのがれて、何ヶ月か、毎日のように三才児のクラスに通ったことがありました。そしてそこで過ごした後、自分のクラスに戻ってきた時には、もうN君のことを恐れず対等に対峙出来るようになったのです。腕力ではまだかまいませんでしたが、気力がまさり、理不尽なことに対してはむかっていくようになりしました。クラスの中で解決出来ずにしまったことは、私の力量不足を見せつけられた思いで落ち込みましたが、子どもが自ら選んで、そして私もまたそういう状況にさからわずにゆだねた結果がそういうことであったのです。

一度体験したはずなのに、人の親になると又、欲が顔を出し、それが、親と子の成長の機会を妨げる結果になってしまっていたのです。子どもを人にほんとうにゆだ

ねることが出来るようになったことは、親としても一つの成長に思えます。手放し、ゆだねて見守ることが、こんなにも難事業であるとは、想像もつきませんでした。でも、今、子どもの成長を目のあたりにして、目にみえるものみえないものに見守られて、子どもははじめて育つものだと思うのです。

